

變化することが出来、且つ其の際の氣分に由りて變る。

各種の判断に關する曲線を夫々獨立なる函數と見ずして、一の誤差函數の部分と見たトムソン氏の見解は、よしや、現在に於ては、此等干與する諸種の因子の實際上の甄別の困難なるがために、急に効果を齎すことがないとしても、新しい考察の方向を示唆したものと見得るのではあるまいか。(一〇、四、一〇)

學界近況

マイノンケ、ベンノ・エルドマン、フラツケンベルヒの計に就いて

三人共昨年の秋に長逝せられたることである。ウインデルバンド、ヘルマンコーエン逝いてより以來ドイセン、ツムメル、ヴェント相繼いで逝き今また此等三人の計に接して獨逸哲學界のために感慨を深うせざるを得ない、そしてあの血と苦悶とで洗ひあつた大戦を轉機として獨逸思想界の前途に開かる、新しき運命と、此等思想家の計との間に何等かの關聯あるものと考へざるを得ない。

い。

マイノンケは一八五三年レムベルヒに生れケラーツ大學の教授となり奥國に於ける實驗心理教室の創始者であつた。氏の思想は種々なる方面に亘つて深き思索と鋭き分析とを示したのであつたが就中氏の所謂對象論(Gegenstandstheorie)と心理學的方面の中心思想たるアンナーメと、夫れの上に築き上げた價值論とが最も注目すべきものであらう。對象論的方面はホルツァーノの思想に重要な意義を負ふべく心理學的方面はブレントノの後繼者と見ても差支なからう。其他ヒュームに得るところ多くエーレンフェルス、ヘプラーとは互に影響し合つた點極めて深かつたやうに思はれる。氏の對象論の中心思想はホルツァーノの表象自體命題自體とヒュームの關係説とを結合したものであつた。それを判明にしたものは一八九一年の Complexions 及 Relation に關する研究及一八九九年の高次の對象に關する研究である。後者は氏の對象論の眞に中心思想を築けるものであつた。されど猶それには對象論的見方と心理學的見方の區別が未だ判明しなかつたのであるが一九〇四年の對象論一般に關する短かき論文に於てはばや對象論は心理學より峻別せられたる一箇の獨立的學として非心理學的領野に築かれたのであつた。それに由れば對象論とは云ふ迄もなく對象の研究であるが氏の云ふ對象とは普通の意味での存在對象でなく、存在と非存在とを對立を超越せる純粹對象である。例へば非存在なるにせよ又は如何にしても思惟すべからざる不合理的なるものにせよ猶それが何等かの意味で Gegenstand の對象たる限り對象としての特質を持たねばならない。かゝる特質を彼は Sein に對

して *Sein* を呼んだ、即ち *Sein* こそ *Sein* (*Sein*, *Nichtsein*) の彼岸にある純粹對象の世界なのであつた。對象論はそれ故に、*Sein* より如何にして *Sein* が構成せらるゝか、他の言葉で云へば *Sein* を潜在的に含む客體 (*Objekt*) よりそれを表現的にあらわす高次の對象即ち客體的なるもの (*Objektiv*) が如何にして成り立つたかを明らかにするものである。この様にして氏は普通の論理學數學の範圍のみならず感覺論にて取扱はるゝ、感覺内容即ち色や音の如きものをも純化して對象の範圍に入れ所謂對象學的に研究せんとしたのであつた。かくの如く對象を純粹に客觀化し、しかも物の存在性より峻別して考ふることは他方に於てまた心的事實の世界をも對象と峻別することになる。對象と内容との區別はホルツァーノよりトワルドウスキーを経て氏に最も判明となつた。氏は心的事實として作用と内容を考へた。(それはプレントノの考へである)。そして心的現象の特色を内容の含み方即ち内在的對象へ向つての志向關係に求めたのであつた。この点から氏は對象論へ還つて對象の *Objekt* と *Objektiv* とを志向關係への重要な役目に置いた。オブジェクトは表象の對象となるものオブジェクトは思惟即ち判斷とアンナーメの對象となるもの、逆にオブジェクトを把握するものが表象、オブジェクトを把握するものを思惟としたのであつた。氏の心理的研究の中で最も重要なものは一九〇二年に *Zeitschrift f. Psych.* の別冊として出した *Über Annahmen* であつて、其の中で「判斷と表象の中間に位して二者に歸入する能はざる特殊の作用」として、また「判斷より多く表象より少ない」としてアンナーメを種々なる方面に亘つて考へた。アンナー

メとは即ち肯定否定の對立を持つ點、即ちオブジェクトを對象とする點で單なるオブジェクトを對象とする表象より區別せられ、肯定否定に對する證認又は信憑を缺く點で判斷より區別せられる。更に云へば後の點では判斷より寧ろ表象に近く前の點では表象より寧ろ判斷に似てゐる。しかし二者とは種を別にする特殊の作用と云ふのであつた。この知的作用の三分説は情意作用に關して一層重要な役目を示すのであつて、情意は對象をひゞり知的作用を介してのみ把握する故にすべてその特色は知的作用のそれによつて定められる。即ち感情は表象感情(内容感情、作用感情)判斷感情(内容感情、作用感情)及び假定感情の三種、細別して五種に別たれる、この判斷内容感情をば價值論の根柢としてこれを價值感情と呼んだのであつた。氏の價值論は氏の對象論があく迄客觀に徹しやうと努力したので對して、エーレンフェルス、クライビヒ等と共に價值感情によつて基礎づけんとする心理主義であつた。更に氏の認識論も價值論と共に氏が心理主義より避けんとするに係はらず認識を認識の作用として見る點に於て確かに心理主義であつた。氏の對象論と認識論に關して晩年の研究を示せるものは一九一五年に公にせられたる大著 *Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit* である。

氏はライプニッツの論理學を新しくしホルツァーノの知識學を蘇がへらせ或る意味でカント哲學の獨斷、就中感性の本質、判斷の對象に關して大なる暗示を與へたことはラスクヤリツケルトの著述に由つても知ることが出来る。氏の現代哲學に對する功績は作用の特色を純粹對象の本質に迄深めた處にあつた。これはホルツ

アノにも氏の師アレンタノにも殆どまたは十分には見られざるものであつた。然しカント哲學に對して暗示を興へたより一層大なる暗示と批難とをカント哲學より負はねばならぬ運命を、ポルツァノに於てと同様に擔つてゐた。確かに氏は純粹對象を實在對象より區別した。氏の眼指した對象は眞に客觀の名にふさはしき純粹なるものであつた。然し氏の對象は主觀より隔離するだけ一層考へられたる」ものと一層無力なる抽象的主觀の產物となり了つたやうに思はれる。それは彼の認識論に於ての認識作用が實在の形式に入れられてゐたゆゑでもあつた。常に對象の本質をして非心理的たらしめんと努めた氏は一切の「作用」を主觀の名に由つて對象より除き去つた。然しカントの先驗主義に由れば對象論を認識論の前に置くべきでなく寧ろ認識論に由つて對象論を基礎附ければならない筈である。對象が如何にして構成せらるゝかは對象論的要素とそれの結合に由つて考ふるより一層深く認識そのもの、核心に由つて考へられねばならなかつた。對象構成の非心理的進展は猶且正しき意味で「意識的」でなければならなかつた。氏の對象はひたすら主觀よりの基礎附けを排した、ゆゑに却つて主觀に墮せるの觀がある。氏の心理學に就いてもそれより歸結せらるゝ難點が存するものと思ふ第一氏は心的作用を實在の形に於て考へこれを時間の中に置いた。第二に情意の作用の本質を知的作用の特色、從つて知的對象の本質に歸入せんとした。すべてこれ等は氏の對象論が若しも先驗的認識論によつて書き替へられなければそれと共に改造せられそして氏の内面的反省の鋭ささに一層の光輝を添へたであらうと思はれる。

アンナーメについても確かにそれは氏の獨創的な、或は氏の最も自ら任じた思想の一つであつたらうと思はれるのであるが、それを以て判断と表象の中間に置くことは議論を生ずる處であらう氏はその著 *„Über Annahmen“* に於てアンナーメを確かに二様の意味に使用してゐると思ふ。其一はアンナーメを表象判断の中間に並立的に位せしむること、其二は並立と云ふよりは寧ろ判断の屬するとは次元を別にする意識の全體の中に含ましめ判断の屬する意識の „Erstinstanz“ であるに對し „Phantasie“ として見ることである。後の意味ならばアンナーメは前の意味に見る能はざる深き見方に私たちを導くこと、思ふ。それはマイノンが自身も氣附かぬものであつた。即ちアンナーメは本質的に判断と異なるものではないが、只意識の次元の相異に由つて意識全體の統一の仕方を変更にするため、知的要素よりは寧ろ情意に於ての特色を異にするために以前の判断より區別せらるゝ、第二の判断に過ぎない。只内容の全體の結合關係を異にするために區別して考へられる判断に過ぎないと思はれる。

氏は六十七歳で逝いたのである。氏の築き初めた對象論的研究にはアメゼテル・マリー・マルチナツクの如き人があり心理學的研究にはヴァイタセク・ゾエヌツシ・フランクル・サキシンゲルの如き人々がある又氏より影響せられた人の中ではヘフラー・エーレンフェルス・クライビツヒ等が有名である。

氏の主なる著書

一、對象論及認識論の方面

1. *Hume Studien, II Zur Relations-theorie, Wien, 1882.*

2. Erkenntnistheoretische Würdigung des Gedächtnisses, Vierteljahrsschr. f. wiss. Philos., 10, 1886.
 3. Zur Psychologie der Komplexionen und Relationen Z. f. Psy. 2, 1891.
 4. Über Gegenstände höherer Ordnung und deren Verhältnis zur inneren Wahrnehmung, ebd. 21, 1899.
 5. Über Gegenstandstheorie, in den von Mehnong ag., Untersuchungen z. Gegenstands theorie und Psychologie" 1904.
 6. Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften, Lpz. 1907.
 7. Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit, 1915.
- 二、心理學の方面
1. Phantasievorstellung und Phantasie, Z. f. ph. 93, 1889.
 2. Zur psych. sehen Analyse, 18 3
 3. Über die Bedeutung de Weberschen Gesetzes, 1896.
 4. Über Annahm., 1902 2A, 1910.
 5. Über Urteilsempfinde. A. f. Psy. 6, 1905.
 6. In Sachen der Annahmen, Z. f. Psy. 51, 1905.
- 三、價值論の方面
1. Psychol.-eth, Untersuchungen zur Wertheorie, Graz, 1894.
 2. Über Werthhaltung und Wert, A. f. sys. ph. 1, 1895.
 3. Für Psychologie und gegen Psychologismus in der allgem. Wertheorie, Logos, 3, 1912.
- 氏の論文集は氏の門人等の手に由つて細註を附せられ三卷の中

次の二卷は公刊された第三卷は價值論に關するものを收むるものと云ふべし。

I Bl. Zur Psychologie, 914

2 Bd. Zur Erkenntnistheorie und Gegenstandstheorie, 1913

(務臺理作)

ヘンリー・ホルドレンは一八五一年 Göttingen に生れ、一八七八年にケルリン大學の私講師となり一八七八年にキール大學の教授、一八八四年にブレメンラウ、一八九九年にハンノ、一八九八年にハンノ、一九〇九年ケルリン大學の教授となり今日に到つたのであった。哲學史家としての氏はデイルタイの死後を受けてカント及びライブニッツのアカデミー版の公刊に多大なる勞力を費したのであつた然し氏の主なる著作は第一卷のみ公にせられし論理學(一八九二年出版、一九〇七年再版)であらうと思ふ氏はシカワルト、フレンタノと共に新しき論理學者の間に數へられるのは論理學を一般妥當性又は規範の學として事實科學と區別した點にあつた。然し氏は猶シカワルト等を共に心理學の見地を未だ十分脱せざるものある様に思はれる。

フアルケンハルヒは一八五一年マルテブルグに生れエランゲン大學の教授、氏の哲學はカント、ヘーゲル以後の組織的大思想家としてロツツエを見、ロツツエを現代哲學に蘇がへらしめんとするにあつた。その著近世哲學史は吾國にても廣く讀まれしものであるが、近世思想の出發點をニコラス・ガウマヌに求めたことは大いに注目すべきものであらうと思ふ。

巴里より

畧 Bouillet のプロチンは仲々珍本にて僅に第一

巻を得申候へ共之でも大の手柄の由に候只今はDenisの佛國哲學史を讀み居り候、なして重要なる本とせば思はれ申さず候へ共よくまこまり便宜に候、之も珍本にて仲々手に入らず候、近代のにはParodiのLa Philosophie Contemporaine en France 有之候へ共未だ探し當らず BoutouxのHistoire de Phil.も註文申候、ソルモン大學にては

Bunswig: La phil. general

Laand: Logique et methode

Basch: La tragique et la Comique

Picavet: Phil. medieval

Rey, phil. ses Rapports avec la science

等の講義始まり居候……コレーシドフランスにヘルゲンゼルロマンの

L'initiation dans les sciences et la metaphysique.

が聞きものを存じ候へ共之は一月の六日より開講の由に候、二人の名あり候へ共多分ルロアが代講せらるゝかを存じ申候一體に科學的(殊に數學的)臭味を帯びた哲學が盛の様に候、Reyを云ひルロマン及び其他 Rongier(此人はLa materialization de l'energie.

La phil. geometrique de H. Poincaré等の著者にして又 Enriques

の翻譯等も有之、牛津のコンケルスでは相對論について大に論じ申候(Tannery等皆然らざるはなく大に興味を感じ居り候下略(山

内文學士より西田教授への書信の一部)

彙報

京都帝國大學文學部哲學科

大正十年度講義題目

正科目

哲學

普通 西田 2 哲學概論

特殊 西田 2 哲學概論補遺、倫理學の根本問題

田邊 2 推理論、無限連續の論理

演習 西田 2 Hegel Logik(in der Enkripptie)

Schelling, Uber das Wesen der menschlichen

Freiheit.

講讀 田邊 2 Kant, Kritik der reinen Vernunft.

西洋哲學史

普通 朝永 4 西洋哲學史

特殊 朝永 3 バークレー後の近世哲學史(特にカント哲學及ヘーゲル後の哲學)

印度哲學史

普通 松本 2 印度哲學

齋藤 2 佛敎教理論

特殊 松本 2 原始佛敎

演習 松本 2 三論玄義

支那哲學史

普通 狩野 2 支那哲學史

特殊 高瀬 2 支那哲學史(近世)

演習 高瀬 2 日本哲學

演習 狩野 2 尙書注疏

講讀 高瀬 2 詩經

心理學

普通 野上 3 心理學概論

特殊 野上 2 精神の種族的發達

演習 野上 2 James, Varieties of Religious Experiences

演習 野上 2

倫理學

普通 藤井 3 一般倫理學

特殊 藤井 2 財産制の倫理

演習 藤井 2 Kant, Kritik der praktischen Vernunft

教育學教授法

普通 小西 2 教育學概論

特殊 野上 2 心身發育の實驗的研究

特殊 小西 2 十八世紀以後西洋教育史

演習 小西 2 Rosenkranz, philosophy of Education
野上 2 Hall, Youth

美學美術史

普通 深田 2 美學概論

普通 深田 2 西洋美術史概説

普通 深田 2 日本美術史概論

特殊 深田 1 藝術批評史

特殊 澤村 2 印度上代佛教美術の研究

演習 深田 2 Lessing, Hamburgische Dramaturgie

宗教學

普通 波多野 2 宗教學概論

特殊 波多野 1 原始基督教

特殊 日野 2 基督教教理史

演習 波多野 2 Kant, Kritik der reinen Vernunft (Dialektik).

講讀 波多野 2 Sextos Empiricos (希臘原文)

社會學

普通 米田 2 純正社會學概論 人口理論の發達

特殊 米田 2 輓近の歴史哲學

演習 米田 2 近代資本主義 近代自由主義

講讀 米田 1 Giddings, Principles of Sociology

副 科 目

英 語

島 a Doyle, Through the Magic Door

獨 語

成瀬 2 一回 澤井氏實用獨逸語階梯

同 a 二回 Thomas Mann, Der Tod in Venedig

佛 語

オリア 2 一回 Choix de lectures françaises. Cours élémentaire
ンチス 2 一回 Cours Complet de langue française. Cours élémentaire

同 2 二回 Choix de lectures françaises. Cours supérieur.
Cours complet de langue française. Cours élémentaire

希 臘 語

田 中 2 一回 Allen, First Year of Greek

a 二回 Platon; Crito, Apology, Xenophon; Memorabilia
a 三回 Platon; Symposium, Homeros; Ilias, Herodotas;

Scleron

佛 教 講 義

齋藤 2 一回 天台の教觀(天台の四教儀)

1 一回 佛教唯心論(攝大乘論)

精 神 病 學

今村 2

美 術 史

植田 2 北歐の繪畫

生 理 學

石川 2

教 育 學 會 例 會

三月廿二日午後五時より學生集會場にて新卒業生のために送別會を開く。谷本先生には芦屋より來會せられ大西友太氏は高野山より山榊龜山兩君は大阪より出席せられ各自の所論匪んにて極めて感じのよき會なりき。

寄 贈 書 籍 雜 誌

マクス 宗教學綱要 文學士 清水友次郎譯
ニコライ 丙午出版社發行

西洋美術史講話古代篇 文學士 矢代 幸雄著
東京 岩波 書店發行

フイ 藝術的活動の起源 文學士 金 田 廉譯
東京 大村 書店發行

プラトン ソクラテスの辯明 文學士 久 保 勉譯
東京 阿部 次郎譯

對話篇 文學士 岩波 書店發行

哲學雜誌、丁講倫理西演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、日華公論、學校教育、教育、内外教育評論、國民教育、教育學術界教育界、教育研究、教育時論、心靈研究